

『母の遺産』

アウグスチヌス 清水 隆

昨年二月末、母は九十五歳の長い生涯を閉じた。天性の明るさと笑顔で他人に親切だったので、皆さんに好かれた一生であったと思います。

しかし、戦後の貧困の中で、肺結核を病み、長期入院という辛苦を負うのです。私が小学校三年生の時で、その入院は八年間に及ぶのです。育ち盛りの兄弟姉妹四人の子供達に、何もしてやれない母親の心境は、いかばかりだったでしょう。

五十年以上も前の事ですが、この時、神様の深い御計画は、草創期の敦賀教会の神父様の布教という訪問に会い、受洗に恵まれるのです。子供達に何も出来ない母は、祈る人となったのです。

私達の誕生日とクリスマスには、ロザリオ一環を祈りますと手紙が届きました。後で気付くのですが、

私達のため、毎日熱心に祈って居たに違いないと。感染で父も入院となり、「神なんかいるもんか」と私。しかし母の信仰は微動だにせず、「これは、神様の御旨なのです」と毅然として、私を諭しました。

母の信仰は一家を救いました。私達と父は次々と全員受洗することになるのです。母はマリア様への敬愛の念も深く、ミサは最前列で、聖体拝領後、席へ戻るとき、マリア像の前を通ると、片膝を付き、頭を垂れていました。後から続く人達も黙礼するという習慣になったようです。

母の祈りの中で特別なものがありました。ドン・ボスコの「病人の回復を願う祈り」で、敦賀教会で重病の、手術を受ける人の何人かに頼まれています。もちろん医療で治癒するのですが、神様は母の祈りに応えて下さったと私達は信じています。

母も九十歳頃からさすがに弱り、兄と姉は病院へ運び、神父様を呼び、「塗油の秘蹟」をお願いしま

した。ぐったりしていたのに秘蹟を受けると、急に元気になり、冗談を言ったりしたそうで、それが二度三度とあって、神父様も不思議と、驚かれたそうです。九十五歳近くになり、入院し点滴だけとなりました。看護婦研修生が一ヶ月程、母を担当してくれましたが、

その研修生に母は「I am glad to see you」と発音したのです。彼女は驚いたり、喜んだり、愛らしいノートを作ってくれました。折紙で鶴や花を作り貼っており、カラー紙に「I am glad・・・」と書いて切り抜いて貼って、文字としてありました。

私達は記念に残したいとも思いましたが、母が喜ぶだろうと、葬式の日、柩の中へ入れました。神父様はそれを知って、告別式でその事を話されました。

お婆さんは、どうして人と付き合う事が上手なのか、その秘密は柩の中のノートにあります。そこには I am glad・・・という言葉が書かれています。人に会うことが嬉しいとは、人と出会う事は神様に会う事なのです。人の中に神

様が存在していらつしやるからです・・・中略。貴女は最後に行く事が有ります。天国の戸を叩いて下さい。そこではイエス・キリスト御自身が戸を開けて下さいませ。そして「I am glad to see you どうぞお入りなつて下さい」と。

このスピーチは私達にとって最高のプレゼントです。長文でしたので、お願いしてコピーを頂きました。母の信仰を大いなる遺産として継承しなければと思いましたが、とても足元にも及びません。生涯の努力目標です。

